

子どもの本だな 35

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

金のがちょうのほん 四つのむかしばなし

レズリー・ブルック文・画

瀬田貞二・松瀬七織訳（福音館書店）

ある人に三人の息子がいました。末息子はぬけ作とよばれみんなにばかにされていました。ある日ぬけ作は、森でお腹をすかせた小人に出会いました。ぬけ作が粗末なケーキと酸っぱいビールをすすめると、それは上等のケーキとぶどう酒に変わりました。小人の、幸運をさずけようという言葉通りに古い木を切ると、切り株に金のがちょうがすわっていました。ぬけ作はがちょうをかかえ旅籠に泊まりましたが、ふしぎな金の鳥の羽をぬきとろうとした宿屋の娘は、手ががちょうにくっついて離れません。とうとう七人もの人間が次々くっついて数珠つなぎになり、ぬけ作たちは王様のすむ都にやってきました。（金のがちょう）ほかに「三びきのくま」「三びきのこぶた」「親ゆびトム」を収めた昔話絵本。テンポのよい語り口と、ユーモラスな挿し絵が子どもたちをひきつけます。読んでもらえば4、5歳から。（片木）

魔法使いのチョコレート・ケーキ

マーガレット・マーヒー 作

石井 桃子 訳（福音館書店）

学校からの帰り道、マイケルの足もとで風がカサコソとなりました。マイケルが「ぼく、犬ほしいな」と言うと後ろから何かがぱたぱたとついてきます。それは大きなオレンジ色の葉っぱでした。葉っぱはマイケルが隠れても、小川を飛び越えてもついてきます。家に着くとマイケルは葉っぱをドアから締め出しました。次の日マイケルは物知りの男に葉っぱをつかまえてもらい、箱の中に閉じ込めました。ところが一人で帰る道はつまりません。マイケルが小屋へ引き返し箱をあけると大きなオレンジ色の犬が飛び出してきました。「葉っぱの魔法」他8篇美しい景色を背景に子どもたちの日常が描かれ、ハラハラドキドキしながら魔法が自然に起こり結末に大いに満足します。不思議さや美しさ、静けさ、温かさを感じる物語集です。8歳位から楽しめます。（西村）

9月	10月	9・10月の移動図書館(いずれも木曜日です)				
8日	6日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
15日	13日	岩見構下 公民館 10:30~10:50	岩見構上 公会堂 11:00~11:20	原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
29日	20日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		吉福 公民館 15:30~15:50	太子 ニュータウン 公民館 16:00~16:30

お知らせ

毎週土曜日に

「おはなしの時間」

を開いています。

4歳~2年生 11:00~

3年生~中3 11:30~

9月のおはなしは、「はらぺこ
ピエトリン」「パンドラ」
「オオカミと7ひきの子やぎ」
などを予定しています。

詳しくはプログラムをご覧
ください。

『漂流の島 江戸時代の鳥島漂流民たちを追う』 高橋 大輔 著

草思社 350頁 2016年5月刊 1,800円 (請求記号)291.3

著者は、『ロビンソン・クルーソー』の实在のモデル、セルカークの住居跡を発見したことで著名な探検家。本書では、日本の鳥島を舞台に、江戸時代の漂流民たちの形跡を追う。

伊豆諸島の南端にある鳥島は、東京から五百八十キロ南に位置し、八丈島と小笠原諸島の間にある小さな無人島で、アホウドリの生息地として知られる。いつ噴火してもおかしくないほど活発な火山島でもあるこの島には、飲水は雨水を溜める以外に得る方法はなく、食べ物も魚介類が冬に渡ってくるアホウドリの肉ぐらいししかない。こんな自然環境の厳しい不毛の地に、ジョン万次郎や土佐の長平など何人も遭難者が流れ着き、遠州の甚八たちは十九年三ヶ月もの年月を生き抜き生還した。史実をもとにした小説や江戸時代の数少ない記録から、住居となる洞窟には鍋や釜、鉄釘などの生活道具や書き置きなどが残されており、漂流者はこれらを使って生き延び、離島時には、後から来る漂流者のためにできる限りの物を残していったことがわかった。著者は、この洞窟の現存を確認するため、アホウドリや火山の研究者などの協力を得て、天然記念物(天然保護区域)のため簡単には行けない鳥島への上陸を実現させる。島は、明治と昭和の大噴火で地形が大きく変わり、洞窟があったとされる漂流里はほぼ消失し、偶然見つけた二つの洞窟も、大戦中の防空壕だと研究者に即答される。諦めきれない著者は、洞窟の正確な位置を知るため記録を徹底的に調べ直し、この洞窟が漂流者たちの住居跡だと確信する。

絶海の孤島で生き抜いた漂流民たちの存在に驚き、何年もかけて漂流者の形跡を追い求める著者の執念に感嘆する。ほかにもアホウドリを絶滅寸前まで乱獲した明治の開拓民や、それを守り繁殖させようと奮闘する研究者たちの様子なども描かれ、知らなかった鳥島の歴史を知ることができる。史実をもとにした小説に、井伏鱒二の『ジョン万次郎漂流記』や、土佐の長平たちを描いた吉村昭の『漂流』などがある。(池之上)

9月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

10月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

休館のお知らせ

9月30日(金)
 ~10月7日(金)
 特別整理のため休館します。期間中は返却のみ受け付けます(10:15~17:15)
 *10月3日・4日は除きます。

カレンダーの×印は休館日です。
 開館は10時~18時。
 金曜日は20時まで開館しています。

地下水

児童書の勉強会で『ホメーロスのイリアス物語』ピカード作(岩波書店)の発表を担当することになった。ギリシアとトロイアの長い戦争の最後の五十日間を描いた物語である。猛暑の上に仕事後はぐったり、そこへ生々しい戦闘場面は厳しく、なかなか読み進められない。息抜きがしたくなり、軽い小説を、と『また、同じ夢を見ていた』住野よる著(双葉社)を読み始めた。主人公の小学生奈ノ花は正義感の強い優等生。だが同級生を内心馬鹿にしているのが、クラスではういている。友達は一入暮らしの「おばあちゃん」、水商売をしている「アバズレさん」、手首に傷のある「南さん」。ある日、学校の宿題で「幸せとは」について考えることになり、これという答えを見つけれない奈ノ花は三人に相談。もちろん答えもそれぞれに違うのだが、私自身も「幸せとは」について考えさせられた。結局は自分の心の持ちようであり、自分の置かれている状況にかかわらず、気持ち前向きにもち、先に希望を見いだせれば幸せなのでは、と思った。

幸せが心の持ちようならば、ネガティブな思考しかできない病気になるってしまった人は本当につらいにちがいない。なんとか希望の支えになれたら、と思う。戦争の真ただ中においても、勇敢さや誇り、正義を信じている戦士は幸せなのだろうか、と疑問を感じつつ、やっと「イリアス」を読み終えた。

(池田)

